

震災の記憶風化を危惧

教団の枠にとらわれず活動して成果

臨済宗妙心寺派地蔵院住職

宮下 玄覚氏

仮設住宅で“花いっぱい運動”

六月末まで長田区の蓮池小学校で毎日、味噌汁などの炊き出しを行ない、現在、MEMORIAL 95117というグループで“仮設住宅に花いっぱい運動”を展開している。被災者の生活拠点になる仮設住宅に花壇作りを進め、花を住民同士のコミュニケーションの材料にしたい、と考えて始めた。

私の寺（西区の公団住宅、通称“団地寺”）がある地域は被害が少なく、さっそく、被災地に飲み水を運んだり、お握りの炊き出しを始めたりしたが、私が育成会長をしているボーイスカウトの団員の親たちがそれを見て自分たちもボラソティアを、と言ってきたので、震災七日目から蓮池小学校を避難所とする人たちに温かい味噌汁などの炊き出しを開始したものだ。

名刺を交換した人、年賀状をくれる人から四十年間音信不通の中学時代の同級生にまで、こういうことをやっているのを協力してほしい、と呼びかけ、立ち上がりの資金は確保した。SVA（曹洞宗国際ボランティア会）から援助金をもらったり、岡山の最上稲荷から缶詰八千缶を寄贈して頂いたりしたが、宗門当局からは一切援助金は頂いていない。

こういう緊急事態に際し、今の宗門の機構ができることがどれほどあるか、私は疑問をもっている。緊急時の組織の対応はトップダウンでなければだめだが、教団の組織は官僚主義に阻まれて動きがとれないのではないかと。私も教団の枠にとらわれていたらほとんど動けなかったろう。

善意の個人、グループでもボランティアを続けていくうちに、幾つもの壁にぶつかる。心の底で「感謝されていないはず」と考えていては挫折する。ボランティアを受ける側の想い、都合もあるはずだ。「もっと大人になってから来てくれ」と仮設住宅の住人から追いつめられたボランティアもいる、と聞く。

行政の官僚主義という壁にぶつかったケースも多いと思うが、私の経験では、脅したり煽てたりすれば、この壁はある程度なら動く。やはり粘り、忍耐と、機転が必要だろう。

今、恐ろしいのは、世間から“震災”が忘れられることだ。オウム真理教事件で震災報道が急減し、時間が経つに連れて世間の関心も薄れてきた。

「今でもボランティアをやっているのか」と聞かれることさえある。しかし、“花いっぱい運動”で仮設住宅に出入りしていると、これまでとは別の問題が起きていることが見えてくる。二カ月に一度、地方で“ありがとうコンサート”を開いて、震災を思い出してもらうよう工夫しているところだ。

宮下 玄覚氏【写真は省略】